ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人　日本学術振興会　ボン研究連絡センター
四半期報告
（2007 年 10 月～12 月）

小山　佐和

＜　目　次　＞

1．ドイツ連邦レベル等での学術動向 ----------1
♪1-1　ジュニアプロフェッサーの将来は見通しが暗い ----------1
♪1-2　ドイツ　エクセレンス・イニシアチブの第二期募集の採択大学が決定----------2
♪1-3　エクセレンス・イニシアチブ　第二期募集に於ける「将来構想」採択大学の特----5
2.　ボン研究連絡センターの活動 ----------7
♪2-1　来訪＆訪問、会議出席等 ----------7
♪2-2　日独共同大学院事業開始に係るセレモニー等に参加 ----------8
♪2-3　JSPS 事業説明会開催（於ライプチッヒ大学）及び JSPS ドイツ同窓会による「会員による会員の招待」参加 ----------11
♪2-4　DAAD 主催「全国大学国際課長・留学生課長年次総会」において「我が国の大学国際戦略本部強化の取組み」説明 ----------12
♪2-5　HRK 議長表敬訪問報告 ----------12
♪2-6 その他の活動 ----------13
3. 今後の予定 ----------14

1．ドイツ連邦レベル等での学術動向

♪1-1　ジュニアプロフェッサーの将来は見通しが暗い

Dpa Nr. 42/2007 p.23, 2007 年 10 月 15 日号を参照

ジュニアプロフェッサーになった者たちは、5 年前に導入されたこの制度を、将来の見通しを立てられないことに鑑み、まだ不十分であるとみなしている。ジュニアプロフェッサー振興協会（der Foerderverein Juniorprofessur）のクロシュ　レツヴァン理事長は次のように述べている。「短期勤務契約が終わったあとに、より高収入を得られる教授に切換えができ、将来の見通しを持てるようにするべきである。」現時点では、ジュニアプロフェッサーの 20%しか、より高収入を得られる職に就けない状態にある。ドイツの若手教授に対応する外国の研究者の地位は、助教クラスであるが、ドイツのジュニアプロフェッサーよりははるかにキャリアアップし、80 から 90 パーセントの助教が契約後に収入増を見込むことが可能である。

また、多くのジュニアプロフェッサーは、自分の研究活動の他に大学教授資格（ハビリタツィオン）も取らなければならない。「ジュニアプロフェッサーなのにもかかわらず大学教授資格もとらなければならないという二重の重荷は本来の（ジュニアプロフェッサー）制度と矛盾している。」とも同氏は述べている。CHE（大学開発センター）の調査では、ジュニアプロフェッサーの 3 分の 2 は大学教授資格も取得すること考えているとのことである。そもそも、硬直的で費用もかかる大学教授資格取得手続きを緩和し、研究にもっと柔軟性を与えるようにすべきということがジュニアプロフェッサー導入の本来の目的であったからである。

レツヴァン理事長は、それでも、ジュニアプロフェッサーの大多数が新たな道に踏み出していることを喜ばしいとして語っている。「もしジュニアプロフェッサーのあるべき理念が定着すれば、約 4 分の 3 のジュニアプロフェッサーが次のステップにキャリアアップすることであろう。」CHE によると、全ドイツで約 800、全教授職の約 4 パーセント、がジュニアプロフェッサーで占められる。レツヴァン理事長は、今後この数字で定着するものと計算している。約 100 人の参加者がジュニアプロフェッサーの今後の展望と機会について 10 月 12 日までブレーメンのシンポジウムで討議している。

ジュニアプロフェッサー制度は 2002 年に当時のブルマーン教育相により創設され、その目的は、若手研究者のキャリアパスを短くすることであった。大学教授資格を取った研究者は、40 歳以上になってからようやく教授レベルになる。それに対して、ジュニアプロフェッサーは博士論文を出してすぐになることができ、米国他の助教（アシスタント・プロフェッサー）と通じる制度である。大学教授資格を有する研究者は毎年約 2000 人ずつ余剰が生じている状況である。

♪1-2　ドイツ　エクセレンス・イニシアチブの第二期募集の採択大学が決定

http://www.dfg.de/en/news/press_releases/2007/press_release_2007_65.html
（DFG プレスリリース No.65、2007 年 10 月 19 日を参照）

2007 年 10 月 19 日にエクセレンス・イニシアチブの第二期募集に係る採択大学が決定した。本年 1 月の予備審査に於いて、本審査への出願が認められたのは、35 校 92 件であった。内訳は、大学院が 44 候補中 21 件、エクセレンス・クラスターが 40 候補中 20 件、将来構想が 8 件中 6 件という結果であった。同結果は、ボンに於いて連邦教育・研究省 Dr. Annette Schavansh、ドイツ国家を代表してベルリン科学上院議員 Prof. Juergen E.Zoellner、ザクセン・アンハルト州教育文化大臣 Prof. Jan-Hendrik Olbertz によって発表された。ドイツ研究会議（DFG）会長 Prof. Matthias Kleiner 及びドイツ研究評議会（WR）会長 Porf. Peter Strohschneider が専攻手続き及びその効果を説明した。約 10 億ユーロが今期のエクセレンス・イニシアチブにおける 28 大学へ助成されることとなっている。

【結果】
大学院及びエクセレンス・クラスターは大学全体の構想ではなく、分野が示されているものであるので、大学名を表に示すのは単なる輪切りのように見えてしまうのが難点であるが、大学の州分布は日本人一般には可視化が進んでいないため、次の表では「大学院、エクセレンス・クラスター、将来構想」のいずれかのラインに採択されている大学の数が、今回の結果を踏まえて多い州を順に並べた。

大学を全体として眺めると、バーデン・ヴュッテンブルグ州が一人勝ちに近い。ただし、各州の規模にもともと差があるので、各州における大学数から換算すると勝率は異なり、ベルリンの勝率が高くなろう。

将来構想の最終候補 8 大学のうち、6 大学が採択されたが、ボーヘム大学は結局エクセレンス・クラスターの候補が採用されず、将来構想としては残れなかった。今ひとつ、残れなかったベルリンフンボルト大学は、最終結果として、大学院 3 研究課題（Berlin School of Mind and Brain,Berlin-Brandenburg school for Regenerative Therapires, Berlin Graduate School of Social Sciences）とクラスター 1 研究課題（Nuro Cure: Towards a Better Outcome of Neurologicfal Disorders）が残り、大学院の採択数としては、ハイデルベルグ大学及びベルリン自由大学と並ぶ最多数で、他の将来構想採択大学より抜きんでていたが、最終的に採択が成らなかった。同大学のように、大学院とクラスターの双方に採択されていたが、将来構想として残らなかった大学は、第一期募集では 5 校だったが、今回は計 13 校となった。

緑は州の名。 （　）内は最終的にいずれかに採択された大学数。 紫色は将来構想採択大学。 黄色は大学院、エクセレンス・クラスター共に最低 1 件採用されている、将来構想採択外の大学。	大学院			エクセレンス・クラスター			将来構想
	第一期採択数	第二期採択数	合計採択数	第一期採択数	第二期採択数	合計採択数	●　第一期採択 ◎　第二期採択
バーデン・ビュッテンブルグ州（8）	4	5	9	3	4	7	4
University of Constance		1	1	1		1	◎
Albert Ludwigs University of Freiburg	1		1		1	1	◎
Ruprecht-Karl University of Heidelberg	1	2	3	1	1	2	◎
University of Karlsruhe	1		1	1		1	●
University of Mannheim	1		1			0	
University of Stuttgart		1	1		1	1	
Eberhard-Karl University of Tübingen		0	0		1	1	
University of Ulm		1	1			0	
ノルトライン・ヴェストファーレン州　（6）	3	2	5	3	4	7	1
RWTH Aachen University	1		1	2	1	3	◎
University of Bielefeld		1	1		1	1	
Ruhr University of Bochum	1		1			0	
Rhineland's Friedrich Wilhelm University of Bonn	1	1	2	1		1	
University of Cologne			0		1	1	
Westphalian Wilhelm University of Münster			0		1	1	
バイエルン州　（5）	4	1	5	5	1	6	2
University of Bayreuth		1	1			0	
Friedrich-Alexander University of Erlangen-Nuremberg	1		1		1	1	

Ludwig Maximilian University of Munich	1		1	3		3	●
Technical University of Munich	1		1	2		2	●
Julius Maximilian University of Würzburg in Bavaria	1		1			0	
ベルリン　（3）	3	4	7	0	4	4	1
Free University of Berlin	1	2	3		2	2	◎
Humboldt University of Berlin	1	2	3		1	1	
Technical University of Berlin	1		1		1	1	
ヘッセン州　（3）	1	1	2	2	2	4	0
Darmstadt University of Technology		1	1		1	1	
Johann Wolfgang Goethe University in Frankfurt am Main			0	1	1	2	
Justus-Liebig-University of Giessen	1		1	1		1	
ニーダーザクセン州　（2）	1	1	2	2	1	3	1
Georg August University of Göttingen		1	1	1		1	◎
Gottfried Wilhelm Leibniz University of Hannover	1		1	1	1	2	
シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州　（2）	0	2	2	1	1	2	0
Christian Albrechts University of Kiel		1	1	1	1	2	
University of Lübeck		1	1			0	
ザクセン州　（2）	1	1	2	1	0	1	0
Technical University of Dresden	1		1	1		1	
University of Leipzig		1	1			0	
チューリンゲン州　（1）	0	1	1	0	0	0	0
Friedrich Schiller University of Jena		1	1			0	
ザールラント州（1）	0	1	1	0	1	1	0
Saarland University		1	1		1	1	
ラインラント・プファルツ州（1）	0	1	1	0	0	0	0
Johannes Gutenberg University of Mainz		1	1			0	
ブレーメン（1）	1	1	2	0	1	1	0
University of Bremen	1	1	2		1	1	
ハンブルク　（1）	0	0	0	0	1	1	0
University of Hamburg			0		1	1	
各期採択数・候補数	18	21	39	17	20	37	3 ＋6＝9

【決定過程】

第二期募集に係る全申請数は 305 件、うち 27 件が「将来構想」であった。1 月の予備審査に於いて、これが大学院 44 件、エクセレンス・クラスター40 件、将来構想 8 件に絞られた。

上記 84 件の大学院及びエクセレンス・クラスターは 29 の線も二院会に割り当てられ、外国人専門家により審査され、ＤＦＧ指名の専門委員会に諮られた。委員は約 320 で、うち 80%が外国

人であった。審査基準は、学問的室、学際性、国際的卓越性、地域の研究機関との融合に置かれた。

ＷＲ指名の戦略委員会は、将来構想の選考を担当し、最初は外国人専門家が現地調査をする。将来構想に係る申請要件は、エクセレンス・クラスターと大学院の両方に少なくとも一件は採用されていることである。

合同委員会は、ＤＦＧ指名の専門委員会と、ＷＲ指名の戦略委員会の委員会で構成されており、その役割は申請書と評価結果を議論である。合同委員会による推薦に基づき、助成委員会が最終判断を下した。

採択された大学院及びエクセレンス・クラスターは、人文・社会科学が強く歓迎され、分野横断の代表的存在でもある。

【エクセレンス・イニシアチブ】
エクセレンス・イニシアチブはトップレベルの学問研究をドイツの大学ニオイテ振興するために連邦首相とドイツの各州大臣が 2005 年 6 月に議会を通したものである。同イニシアチブは５年間継続する。エクセレンス・イニシアチブの一部としてトップレベルの研究振興のために全部で 19 億ユーロの事業予算が 2006 年から 2011 年までに組まれている。連邦と州政府による各助成ラインの基準金額に係る協定によると、各大学院は、年額 100 万ユーロ上限、各エクセレンス・クラスターは年額 650 万ユーロ上限、将来構想は、年額 1300 ユーロ上限である。ただし、基準でしかない。

10 月 19 日の発表を以てエクセレンス・イニシアチブの第二期募集は修了した。去年の 10 月に発表された第一期募集に於いては、8 億 7300 万ユーロが 18 大学院、17 エクセレンス・クラスター及び３将来構想に助成されることとなった。

エクセレンス・イニシアチブは、またドイツに研究に係る全経費支援の導入という機会をもたらすこととなった。各プロジェクトは、研究、施設の調達、賃料等により生じる間接経費をカバーするため、全経費の 20％が追加配分される。

【その他】
10 月 23 日 16 時半から 17 時半までエクセレンス・イニシアチブに係る質疑応答を DFG の Kleiner 会長がライブチャットにより受けるという試みが実施された。残念ながら、当センターには音声が受信出来るようになっていなかったため、聞くことは不可能であったが、このような方法を設けることから、ドイツの高等教育機関に於ける過熱ぶりが伺える。

なお、大学院及びエクセレンス・クラスターは、飽くまでも大学全体でなく課題別切り口があることから、http://www.dfg.de/en/news/press_releases/2007/press_release_2007_65.html
上記ウェブサイト等にて採択課題別に分野を確認されたい。

♪1-3 エクセレンス･イニシアチブ 第二期募集に於ける｢将来構想｣採択大学の特徴

dpa Nr. 43/2007, 2007 年 10 月 22 日号を参考

2007 年 10 月 13 日に、エクセレンス・イニシアチブの第二期募集に於ける採択大学等が発表された。「将来構想」の概要が dpa に於いて紹介されたので、各々の特徴を報告したい。

大学名	アーヘン工科大学

	Rheinisch-Westfaeliche Technische Hochschule Aachen (RWTH)
学生数	約 31,000 人
大学の特徴	・ ドイツの伝統的大学の一つ。 ・ 研究開発の重点は工学で、世界的に有名。 ・ 工学に続く学部としては、自然科学、人文科学、社会科学、経済学、医学がある。 ・ 大学外のユーリッヒ研究センター（ヘルムホルツ協会所属の研究センター）との間で、年間 5 億ユーロ以上の予算を持つ研究同盟 JARA を形成。
将来構想の特徴	ユーリッヒ研究センターとの共同

大学名	ベルリン自由大学 Freie Universitaet (FU) Berlin
設置年	1948 年
学生数	34,000 人以上　（ドイツ最大の大学の一つ）
大学の特徴	・ 東ベルリンの伝統的なウンター・デン・リンデン（現フンボルト大学）と対を成す大学として西ベルリンに設立された。 ・ ウンター・デン・リンデンが当時全面的にソビエト占領軍の影響を受けていたことに対し、ベルリン自由大学はアメリカの支援を得て、ベルリンの研究者と学生が西ベルリンに新設したもの。
専攻数	100 以上
将来構想の特徴	国際的ネットワーク大学

大学名	フライブルク大学 Albert-Ludwigs-Universitaet Freiburg
設置年	1457 年　（ドイツ最古の大学の一つ。バーデン・ヴュッテンベルグ州でハイデルベルグ大学に次いで 2 番目に古い）
学生数	約 22,000 人　(職員数は約 11,780 人)
大学の特徴	・ 大公 Albrecht6 世が設立。 ・ 最も大きな専攻はドイツ文学。
専攻数	60 以上　（学部数は 11）
将来構想の特徴	一流の研究者の為の研究の自由の確保

大学名	ゲッティンゲン大学 Georg-August-Universitaet-Goettingen
設置年	1737 年
大学の特徴	・ 古典的な意味での総合大学＝最も重要な学術分野をカバーしている大学(Volluniversitaet)である。 ・ 研究開発の重点は、生物科学、脳科学、環境科学、人文科学。 ・ 大学に DFG の 5 つの共同研究センター（Collaborative Research Centre: Sonderforschungsbereiche）、DFG 研究センターの他、多数の施設も付属してる。 ・ マックスプランク研究所及び他のゲッティンゲンの大学外の研究施設との共同教授が 11 名いる。
専攻数	約 120　（学部数は 13）
将来構想の特徴	専攻の多様性

大学名	ハイデルベルグ大学

	Ruprecht-Klaus-Universitaet Heiderberg
設置年	1386 年　(ドイツ最古の大学)
学生数	約 26,000 人　（教授約 380 人、職員約 11,500 人）
大学の特徴	・ プファルツ選定候 Ruprecht 一世が設立 ・ 神学、法学、医学、哲学が当初の学問分野。1890 年に自然科学も加わった。現在は全ての学問分野を備え、特に医学、数学、法学が有名。
専攻数	150 以上　（学部数は 12）
将来構想の特徴	専攻の多様性と文理融合

大学名	コンスタンツ大学 Universitaet Konstanz
設置年	1966 年
学生数	約 10,000 人　（当初計画では 3,000 人だった）　（教授約 170 人）
大学の特徴	・ 将来構想計画の最終審査に残った大学の中でも最も規模が小さく、医学と工学が無い。自然科学、人文科学、社会科学が教育分野。 ・ 外国人学生が 12.3%を占め、約 80 カ国から受け入れている。 ・ Institute の代わりに 3 つの超領域分野のセクションが設置されている。 ・ 最も大きな専攻は法学。 ・ バチュラー、マスター過程制度の導入の先駆的大学。
専攻数	約 40
将来構想の特徴	若手研究者の為の主導的センターになること

２．ボン研究連絡センターの活動

♪2-1 来訪＆訪問、会議出席等

【10 月】

10 月 02 日（火）　田中所長が「Sputnik50 周年シンポジウムに出席及び招待講演」のた
調査研究出張（～06 日）（於　ロシア）

10 月 09 日（火）　田中所長が AvH 選考会出席（於　ボン）

10 月 11 日（木）　田中所長、小山が日独共同大学院事業による東京大学および Halle-Witternberg 大学協力事業開所式出席、国際担当副学長および国際課長と懇談（於　ハレ）

10 月 16 日（火）　小山、福島国際協力員、岸田非常勤学生がボン大学ウェルカムセンター主催勉強会出席（於　ボン）

10 月 19 日（金）　JSPS 事業説明会開催（於ライプチッヒ大学）及び JSPS ドイツ同窓会による「会員による会員の招待」参加（～20 日）（於　ライプチッヒ）

【11 月】

11 月 07 日（水）　デュッセルドルフ総領事　新任挨拶のため来訪

11 月 09 日（金）　田中所長が JSPS-DFG ラウンド・テーブルに係る打ち合わせ外のため-

時帰国（～19 日）（於　東京）
11 月 15 日（木）　小山が、DAAD 主催「全国大学国際課長・留学生課長年次総会」において「我が国の大学国際戦略本部強化の取組み」説明（於　ボン）
11 月 21 日（水）　田中所長、小山が HRK 議長を表敬訪問（於　ボン）
11 月 23 日（金）　小山、福島国際協力員がフライブルグ大学主催バーテン・ビュッテンベルク州研究系 9 大学国際課長交流会に於いてプレゼンテーション（於　フライブルク）
11 月 26 日（月）　小山がデュッセルドルフ日本総領事館主催交流会参加（於　デュッセルドルフ）
11 月 27 日（火）　MPG 気象学研究所との JSPS-DFG ラウンド・テーブルに係る打ち合わせ（～28 日）（於　ハンブルク）
11 月 28 日（水）　ハンブルク大学国際課長との打ち合わせ（於　ハンブルク）
11 月 30 日（金）　JSPS ドイツ同窓会幹部との打ち合わせ（於　ボン）

【12 月】
12 月 08 日（土）　田中所長がサンディエゴ(Space Week Sputnik50 周年シンポジウムに出席及び招待講演のため調査研究出張（～14 日）（於　サンディエゴ）
12 月 10 日（月）　DFG Kruessmann 国際課長　外と JSPS-DFG ラウンド・テーブルに係る打ち合わせ（於　ボン）
12 月 18 日（火）　田中所長、小山、現地職員２名が AvH フリューバルト会長離任式参加（於　ボン）
12 月 19 日（水）　田中所長が JSPS-DFG ラウンド・テーブルに係る打ち合わせ等のため時帰国　（～26 日）（於　東京）

♪2-2 日独共同大学院事業開始に係るセレモニー等に参加

2007 年 10 月 11 日（木）に、ザクセン・アンハルト州にある Halle 大学（正式名称：Martin-Luther-Universitaet Halle-Wittenberg）と東京大学との日独共同大学院事業の開始に係るセレモニーが開催された。これに先立ち、同大学に研究・国際担当 Ulrich 副学長（Prof. Dr.-Ing. Habil.Joachim Ulrich）とも約 1 時間会合を設けて頂いたので、同懇談と共に、報告する。

＜懇談会＞14:45～15:50
参加者は次のとおり
Halle 大学側　Prof. Dr.-Ing. Habil. Joachim Ulrich（研究担当副学長）
　　Prof. Dr. Genise Folhanty-Jost　（ドイツ側代表者の 1 人）
　　Dr. Manfred Pichler　（国際交流課長）
東京大学側　木畑　洋一（教授・前総合文化研究課長）
　　石田　勇治（教授）
JSPS 側　田中　靖郎（センター長）
　　小山　佐和（副センター長）

まず始めに、Ulrich 副学長より、自分も JSPS のポスドク・フェローであり、今も日本の研究者との交流を続けているとの話があった。また我が国の旧 5000 円札に肖像画が描かれていた新渡戸稲造が、Halle-Wittenberg 大学農学部から 1890 年に博士号を取得しているなど、Halle 大学における日独の交流関係は長い歴史があったことが紹介された。また 2005 年の日本に於けるドイツ年の行事の一環として早稲田大学と薬学に関するシンポジウムを我が国に於いて開催したことも紹介された。そして、近年の Halle 大学における日独交流が、特に日独共同大学院事業のドイツ側代表者の一人である Folhanty-Jost 教授と東京大学とのこれまでの交流により維持され、日独共同大学院事業（ドイツ側に於いては DFG による IRTG 事業）の採択を機に、若手の研究者間の交流に発展するきっかけとなったことを評価しているとの話があった。この共同課題の注目すべきところは、政治・文化・言語の相互理解があって初めて「日独交流」が復興・振興されることから、文系の交流が極めて大切であり、これが大学の特性にもつながる点にあることなどを強調した。

これを受けて田中センター長が、日独は価値観を共有している部分が多いせいか、来日するドイツ人研究者が親日派となって帰国することが多い。また、学術レベルが拮抗していることから、互恵的パートナーであるから、若手研究者による日独協力を促進することは大切である旨、述べた。

日独共同大学院のドイツ側代表者の 1 人である Folhanty-Jost 教授から、人文・社会系の研究における交流の進展は次世代の教育にも大きく係わることが強調された。この度の交流では、共通語は英語でなく「日本語とドイツ語である」ことに特徴がある旨紹介され、言語の持つ役割が相互理解の根幹であるとの基本的考えを示した。本事業における交流開始に先立ち、東大の学生は Halle 大学に於いて 2 週間ドイツ語で講義を受けていること、また来年 3 月には Halle 大学側の学生が東大を訪問し、日本語を多く取り入れることを計画していると述べた。

この他、同教授からは、戦後の歴史の関係で 1992 年まで同大学での日独交流は減っており、また、Japanologie(日本学)の研究者が日本への「窓口」としての役割はあまり果たしてこなかったことを振り返る発言があった。田中センター長からも、Japanologie の研究者が、自らの研究には熱心だが、日本との「架け橋」としての役割は必ずしも周りが期待したほどではなかったことはドイツ全体に見られる傾向で、これがドイツ全体としての日本への関心の低下の一因でもあるかもしれないと述べた。特に、ドイツの大学は近年、中国に関心を向けていることから、Japanologie が全体として衰退傾向にあることを懸念した。これに対し、Ulrich 副学長は、Halle 大学は Japanologie を守って行きたいこと、Japanologie で日独交流の支援を得ていることを大学の特徴の一つとして可視化を図りたいことなどを述べ、Folhanty-Jost 教授のようなアクティブな研究者を中心として、セミナーを実施したり、文系であるため、地域への働きかけも進め、これにより日独相互理解を一層深めたいとの意欲を語った。

また、副学長からは同大学には、日本で博士号を取った教授が 7 ～8 名いるため、日本文化に興味を持つ学生を惹き付けている。また、そのような日本通の研究者は、産業界などからもアドバイスを求められることがある。との情報があった。若手研究者の交流を促進するため、そのような窓口となってくれそうな先生に渡して頂くため、ＪＳＰＳ

サマープログラムを紹介した。懇談会出席者全員にフライヤーを渡し、国際課長には複数枚を配布のため預けた。

事業については、ＤＦＧによるＩＲＴＧでの支援期間に比しＪＳＰＳによる日独共同研究事業の支援期間が短いことが問題としてあげられた。ＪＳＰＳ側としては現時点で支援期間を延長出来るか否かについて回答することは出来ないが、良い成果をあげることが検討への一歩となろうことが挙げられた。その具体的な方法としては、ＪＳＰＳの欧米短期も含めたポスドク・プログラムへの優秀なドイツ人研究者の応募が増えるなどは、日本での研究に魅力を感じる若手研究者が増えたことの実証となりうること、また、同事業によるドクター論文や研究論文の数などが増えることなども、自然科学系の研究者に「文系が博士号をなかなか出さない」という偏見を除く役割も果たし、効果的ではないか、との意見もあった。

このほか、研究としての協力が発展した場合は、先端科学協力事業は日本側のみの支援であるが検討に値し、またＩＴＰプログラムも相手国に既に経費があることから可能性が有る旨情報として提供した。なお、石田教授からは、ＤＡＡＤの協力により、東京大学総合文化研究科にヨーロッパセンターが設置され、日本に於ける独研究、ヨーロッパ研究もより盛んにすることが目指されている旨、情報の提供があった。最後に、Ulrich 副学長から、ＪＳＰＳによるイベントにはいつでも協力するという非常に心強い申し出があった。

＜事業開始セレモニー＞17 時 00 分～
Ulrich 副学長の発言のとおり、文系による研究は地域からの日独交流への理解を高めることに役に立つとの理解がこの交流の精神を支えている。本研究は地域研究であることから、大学関係者のみならず、Halle 市の代表 Philipp Adlung 博士、ザクセン・アンハルト州文化省研究・技術移転部長の Thomas Reitmann 氏など地域の代表にも祝辞が求められた。この後、日本大使館の氷見谷一等書記官の祝辞に続き、Halle 大学の Prof. Dr. Wulf Diepenbrock 学長、木畑洋一東京大学前総合文化研究科長が開始を言祝ぎ、スポンサーとして DFG から IRTG 担当の Dr. Ruth Narman が、JSPS から田中センター長が祝辞を述べた。祝辞の最後に Folhanty-Jost 教授からも経緯等が述べられ、同教授により流暢な日本語による謝辞も加えられた。また、Prof. Dr. Manfred Hettling 氏からも挨拶があった後、ベルリン社会科学研究センターの Prof. Dr. Juergen Kocka 氏によるキーノート・スピーチ”Buergertumsforschung und Zivilgesellschaftsstudien. Erfahrungen und Anregungen(ブルジョアジー研究と市民社会研究。経験と示唆)” が披露された。

なお、このセレモニーの後に、本協力について困難だった点などがあったかを事務的な面において活躍された教授に確認したところ、日本人側はドイツ語ができることが前提であることから、語学に関してはむしろドイツ側の方が、日本語の不自由さがある。ドイツ側は長期支援であることから、当該研究のために学生も募集するが、日本側は支援期間の制約があることから、そこまではしにくい。従って学生の教育という側面に於いては、ドイツ側の方がより課題の核に近い学生が集まっているという側面は見受けられるとのことであった。しかしながら、既に交流が長く、事前シンポジウムなども 2 回実施しているため、比較的スムーズに開始出来たという感想があがった。

♪2-3　JSPS 事業説明会開催（於ライプチッヒ大学）及び JSPS ドイツ同窓会による「会員による会員の招待」参加

JSPS ボン研究連絡センターは、2007 年 10 月 19 日（金）午前中に JSPS 事業説明会及び日本の大学等機関紹介をライプチッヒ大学に於いて開催した。ライプチッヒ大学は、かつてゲーテやライプニッツが学んだドイツで 3 番目に古い伝統ある大学で、日本人も森鴎外や朝永振一郎が学んだが、最近では、アンゲラ・メルケル現ドイツ首相が卒業している。この度の催しでは、同大学の他、近隣のドレスデン大学、ハレ大学等からも学生、研究者及び国際交流担当者が出席し、45 名以上が集まり、関係者を含め 60 名近くとなった会場は椅子が足りなくなるほどの盛況振りであった。

JSPS ボン研究連絡センターは数年前から各大学を訪問し、事業説明会を実施してきた。本年は、本会事業説明のみならず、JSPS が日本の大学の国際化を支援する事業の一環として、欧州に拠点を構える大学等関係機関に参加を呼びかけ、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、早稲田大学、日本大使館、ケルン日本文化会館（国際交流基金）から参加の合意を得、20 分程度の機関概要説明及び資料配布の場を設けた。まず、大学等説明に先立ち、ライプチッヒ大学長 Prof. Dr. Franz Haeuser から開会の辞を頂戴した。続いて、田中所長から説明会の趣旨説明を行った。本会からは、渡航費及び共同研究費支援のための事業説明を副センター長が行い、メンクハウス会長からも本会事業経験者による同窓会活動の説明をいただいた。

今回の催しは、日本の多くの大学の参加協力が得られたことはもとより、ライプチッヒ大学の非常に友好的かつ協力的な支援をいただいたことにその成功の大きな部分を負っている。中でも同大学経済学部で、同窓会員の Prof. Dr. Friedrich U. Vollmer は、半年以上前から準備にご協力くださり、学内外への効果的な広報を親身に考え、実行に移してくださった。参加者の多くが、この為に作成したフライヤーを握りしめて会議室を訪れていた姿が非常に印象的であった。

参加者のうち、半数以上の 26 名からアンケートを回収できた。これによると、このうち、58%が博士課程未満の学生、19%が博士課程在籍中の学生で、残りがポスドクや Privatdozent、国際担当の事務職員であった。88.5%の参加者が「非常に役に立った」または「役に立った」と回答している。このことから、同窓会の担当教授およびライプチッヒ大学のご協力のおかげで参加者の飛躍的な増大したうえ、日本の大学からのご協力も得たことにより中身も充実したものと言える。

同大学からは、2000 年度にボン研究連絡センターが学術イベントを開催した時にも手厚い協力を得た。この度の非常に好意的なご協力にもこの場を借りて感謝したい。

♪2-4　DAAD 主催「全国大学国際課長・留学生課長年次総会」において「我が国の大学国際戦略本部強化の取組み」説明

2007 年 11 月 15 日（木）に小山が DAAD 主催「全国大学国際課長・留学生課長年次総会」に於いて「我が国の大学国際戦略本部強化の取組み」として JSPS および JISTEC に文部科学省から共同委託されている「大学国際戦略本部強化事業」の中間報告に基づき 1 時間、発表及び質疑応答を実施した。同総会は、11 月 14 日から 16 日まで全ドイツの大学等高等教育機関を対象に毎年開催している勉強会で、大講義のほか、講義形式の分科会とパネルディスカッション形式の分科会が 2 回ずつ設けられている。参加者はその中で、個々に興味がある会に参加する。課長クラスの情報交換の場としても機能している。

小山が説明を実施した会は、DAAD の Dr. Toyka－Fuong アジア担当国際課長を座長とした会で、事業紹介よりも「日本の大学の国際化」をして欲しいという形で依頼されたものであるが、いずれにしてもそのような限定的な話題であるにもかかわらず、関心を示す大学があったことに正直驚いた。「日本」がキーワードであった大学と、「大学の国際化」というキーワードで比較対照を期待した大学があったように思われる。その意味では、我が国の 20 大学をまず累計したうえで、それぞれを観点別に分類し、特徴分析がなされたうえで、良例の提示を行うという同事業の進め方は、例示が日独間での環境の違いを超えて、自大学の状況に照らし興味を引いたようである。
　使用した資料は公式な英訳でないことを断ったうえで、DAAD のサイトに掲載されている（本部了承済み）。

♪2-5　HRK 議長表敬訪問報告

2007 年 11 月 21 日（水）に田中センター長及び小山が高等教育機関長会議(HRK)議長である Prof. Dr. Margalet Wintermantel を表敬訪問した。同氏は 2006 年 3 月 21 日に議長職に就任し、これまで当センターに於いては、国際担当副議長との打ち合わせの機会はあったが、近年のドイツの大学改革などを受け、極めて多忙である同議長との懇談は、今回初めてで、1 時間に渡り実現した。Wintermantel 氏は、日独の大学長間の交換交流事業が既に一往復しており、また、日独間の学術のレベルは同位にあることから、日本との関係の強化に好意的に対応くださり、具体的な協力に関する賛同をいただいたので、概要報告したい。

田中センター長から、我が国の特に国立大学は大学改革の一環としての法人化により、国際化は各大学にとっての重要な課題となったこと、また法人化により学長のリーダーシップが強まり、その采配が国際競争及び協力に係る成功の鍵を握る可能性が高くなったことが最近の傾向であり、日本の大学にとっては、国外へのより積極的なアプローチを大学として相手国大学の学長に見える形で実施することが重要になってきたことと、この流れが、日独共同大学院事業、ITP のような国際的な共同教育研究事業、WPI やグローバル COE プログラム及び JSPS Core-to－Core プログラムのような COE プログラムを新たに産む背景となったことを説明した。

Wintermantel 氏からは、同様に DFG による Research Center 事業が、2001 年にまずカールスルーエのナノテク研究所から始まり、国際的研究拠点を目指して設置され、これが Cluster of Excellence のモデルとなったと説明。また、大学の自治権は強くなり「研究者がどのようなプログラムを欲しているかを満たすことが重要である」という視点が重要視されてきていると説明した。

具体的には、大学長といえども、大学対大学という交流は研究交流の中身の交流が大切であるために大学名のみを前に出しても直接的に促進しにくいが、研究課題を表面化させることによる興味を惹くことが大切である旨、同議長から提案があった。

なお、COE 或いは、ドイツの Cluster of Excellence というカテゴリーに関しては、エクセレンス・イニシアチブの影響により、大学ランキングを気にする傾向が高まっているようである。「タイムズや上海の大学ランキングは日本の大学にとって、外国の大学との協力に影響があるか？」という問いがあった。これに関しては、もとより「大学対大学の研究」は存在し得ず、研究協力はそのようなランキングとは別の次元から少しずつ大きく発展するものであり、我々はその発展段階の様々な段階に於いて協力を促進出来るプログラムを提供するものであること。そのため、既に存在している日独交流を育てることも大切であり、また日独協力へ踏み切るきっかけが掴めない場合に、そのきっかけとして存在するものであることを強調した。

なお、同会議は、総合大学・テクニカル大学のみならず、高等専門学校（Fachhochschule）も会員となっているため、高等専門学校にとってもメリットがあるか否かについて確認があり、JSPS の事業の対象としては問題ない旨回答している。

これを受けて、把握しうる限りの日独交流に関する研究課題名、代表者名、コンタクト先などのリストと共に、日本の COE 等における研究などの普及のため、広報に助力をいただけることとなり、まずは、なんらかの形で、同リストを配布すること、また来春 4 月 21 日にイエナにおいて実施される HRK 総会において JSPS がエキシビションを開催出来るスペースを確保することを約してくださった。

♪2-6 その他の活動

- 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- 情報提供ホームページ”forschen-in-japan.de”の拡充作業
- ドイツ語版ニューズレター（ルンド・シュライベン）等の作成・配布
- 各種照会、各種情報収集・調査、各種情報提供業務
- 日本学術振興会事業の広報（資料出展、HRK ニュースレター掲載ほか）
- ドイツ訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- 事業の審査・広報に協力する対応機関との協議
- 第 13 回日独シンポジウム（2007 年 5 月開催）開催準備
- JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション(2008 年 5 月開催)開催準備
- JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション(2007 年 5 月開催)報告作成
- JSPS ボン研究連絡センター年次報告会（2007 年 8 月開催）報告作成
- JSPS 事業説明会（2007 年 10 月開催予定）準備

・ DFG とのラウンド・テーブル開催準備

3. 今後の予定

2008 年

01 月 14 日（月）	田中所長がデュッセルドルフ総領事官　総領事官邸名刺交換会出席（於　デュッセルドルフ）
01 月 15 日（火）	田中所長が在独日本大使館名刺交換会出席（於　ベルリン）
01 月 16 日（水）	JSPS-DFG 共催「第 1 回ラウンドテーブル」開催（～17 日）（於　ハンブルグ）
01 月 23 日（水）	小山、ガンター職員が H20 年度事業紹介活動及び同窓会活動「会員による会員の招待」のため、ボッフム大学往訪（於　ボッフム）
01 月 28 日（月）	ケルン日本文化センター往訪（於　ケルン）
02 月 05 日（火）	GWK（総合学術会議）　Schulegel 事務局長往訪（於　ボン）
02 月 12 日（火）	田中所長、小山、シュルツ職員が AvH と外国人特別研究員（対応機関推薦分）とフェオドア・リューネン・プログラムに係る打ち合わせ（於　ボン）
02 月 12 日（火）	田中所長が AvH 選考会出席（於　ボン）
02 月 18 日（月）	早稲田大学　大野国際部長、御子柴ヨーロッパセンター長代理来訪
02 月 18 日（月）	小山、ガンター職員、シュルツ職員が第 13 回日独学術シンポジウム開催地下見及び打ち合わせ（～19 日）（於　ロストック）
02 月 25 日（月）	田中所長、小山、福島国際協力員、現地職員が同窓会「戦略拠点」説明会開催（於　ボン）
03 月 05 日（水）	在独日本大使館福井一等書記官来訪
03 月 05 日（水）	野尻次期国際協力員が引き継ぎ出張のため来訪（～7 日）
03 月 11 日（火）	早稲田大学ヨーロッパセンター　御子柴センター長代理　来訪
03 月 19 日（水）	在独日本大使館　氷見谷一等書記官、西井次期一等書記官　来訪
03 月 29 日（土）	福島国際協力員が帰国
04 月 01 日（火）	野尻国際協力員が赴任
04 月 14 日（月）	小山が業務打ち合わせ（於　東京）
04 月 22 日（火）	HRK 総会に於いて JSPS 事業エキシビションを開催（於　イエナ）
04 月 23 日（水）	AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション（JSPS 外国人特別研究員を含む）及び帰国者報告会出席）（於　ベルリン）
04 月 24 日（木）	田中所長がセンター長会議出席（於　東京）
05 月 16 日（金）	第 13 回日独シンポジウム開催（～17 日）（於　ロストック）
06 月 03 日（火）	AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション（JSPS 外国人特別研究員を含む）及び帰国者報告会出席
初夏	JSPS サマープログラムのための渡航前オリエンテーション開催（於　ボン）
晩夏	「学振の夕べ」開催（於　ボン）

10 月 07 日（火）	AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション（JSPS 外国人特別研究員を含む）及び帰国者報告会出席
10 月 16 日（木）	JSPS 事業説明会開催（於ボッフム大学）及び JSPS ドイツ同窓会による「会員による会員の招待」参加（～17 日）（於　ボッフム）
秋または冬	第５回日独コロキウム開催